

無のダイナミズム：要旨

氣多雅子

「無」という語が古代において反訓文字の性格を有していたことを、森秀樹先生が指摘している。反訓文字とは、たとえば「離」という一つの語の中に、「離れる」と「くつつく」という反対の意味が含まれていることを云う。森先生は、「無」という語に「存在が隠れて見えないこと」と「そこに存在の顕れを見ようとする」観念とが混在していたと述べている。無という語に内包されているこの隠れと顕れ、非在化と存在化のダイナミズムは、西田幾多郎の「無の自己限定」という考え方において顕著な仕方で見出される。ある意味では、西田の哲学思想は、この無という語の内包するダイナミズムをその最も徹底した形で取り出そうとする努力の足跡であると言うことができよう。西田の思想は時期によって変容があるので、ここでは絶対無ということが最も主題的に論じられていると思われる『無の自覚的限定』の思想を中心に考察する。

「無の自己限定」とは「限定するものなくして自己自身を限定する」ということであるが、この事柄を解明する手掛かりとなるのは、絶対無の自覚的限定のノエマ的方向とノエシス的方向という二つの方向である。前者は、絶対無のノエマ的限定線に沿って弁証法的に自己自身を限定するものであり、直線的限定と呼ばれる。後者は、絶対無のノエシス的限定に沿って円環的に自己自身を限定してゆくものであり、円環的限定と呼ばれている。そして、この円環的限定と直線的限定とがどのように関係するのかということは、「周辺なくして到る所が中心となる無限大の円」という有名な比喻によって説明されている。これらの考察を通して、無のダイナミズムの諸相を考えてみたい。

これらの事柄は時の成立と歴史的世界の成立に関わっている。時の成立、歴史の成立ということは、西谷啓治が『宗教とは何か』で、「空の立場」の考察とともに取り組んだ問題である。西田の絶対無のダイナミズムの特質の一端を、西谷の空のダイナミズムを見遣ることで、明らかにすることも試みたい。